

Title	心的内容に関する外在主義と自己知の認識的特権性は両立するか？
Author(s)	前田, 高弘
Citation	年報人間科学. 22 P.175-P.189
Issue Date	2001
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/8574">https://doi.org/10.18910/8574</a>
DOI	10.18910/8574
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 心的内容に関する外在主義と自己知の認識的特権性は両立するか？

前田 高弘

〈要旨〉

心的内容に関する外在主義と自己知の認識的特権性は両立するか、という問題に対して私は、Putnamに代表される標準的な外在主義はそれと両立しないが、外在主義一般がそれと両立しないわけではないと答える。その問題について、外在主義と自己知の認識的特権性が両立すると仮定した場合に、外的世界に関する事実がアプリアリに知られ得ることが帰結することを示すが、非両立論者の一つの典型的な論法になっているが、その論法はPutnam流の両立論を決定的に反駁することはできない。問題の核心は、標準的な外在主義における信念帰属のあり方に求められなければならない。即ち、標準的な外在主義では、信念帰属において、自己知の認識的特権性を認める限り、不合理な信念を不当に帰属させることになるが故に、自己知の認識的特権性が認められないのである。自己知の認識的特権性を尊重する外在主義は基本的に、行為や思考が行われる特定のコンテキストを重視するものでなければならない。

キーワード

外在主義、自己知、アプリアリ、反懐疑論、信念帰属

標題の問いに対して私は、否定と肯定の両方によって答えたいと思う。すなわち、標準的な外在主義は、自身の心的状態の内容に関する知識の認識的特権性」と両立しないが、外在主義一般がそれと両立しないわけではない。

ここで「標準的な外在主義」とは、PutnamとBurgeの名前を聞いて連想される類の外在主義を指す。外在主義が自己知の認識的特権性と両立するかという問題は、最近の心の哲学において割りと賑やかに議論されているトピックの一つであるようだが、そこで問題にされるのは例外なく標準的な外在主義である。それは、ある意味、当然であろう。なぜなら、その種の外在主義の起源とされるPutnamの双子地球の議論が、当の認識主体の与り知らぬ環境的条件下によって、その主体の用いる語の指示が決定されることを主張するものであるからだ。ただし、Putnamにおいては、語の指示と心的内容とは区別され、特に、環境的条件の差異に依存しない心的内容として「狭い内容」が指定されていた。それ故、外在主義は自己知の持つある種の認識的特権性を脅かすのではないかという懸念は、「狭い内容」によって緩和されていた（あるいは誤魔化されていた）と言えるのだが、McGinnやBurgeがPutnamの論点を拡張して、単に語の指示を決定するだけでなく、心的内容そのものを個別化する原理として外在主義を規定したことにより、その懸念は外在主義にずっと付きまとうてきたように思われる。

実際、外在主義が自己知の認識的特権性と一見両立しないように見えることは、当の外在主義者たちも認めざるを得ない事実である。

だからこそ、DavidsonやBurgeのように、自己知の認識的特権性を否定したくない外在主義者たちは、その両立不可能性が単なる見かけ以上のものではないことを論じる必要があったのである<sup>10</sup>。そして、この問題に関する最近の主な議論は、Burge等とその議論と、それに対するBoghossianやMcKinsey等の反論が契機になっていると言える。冒頭で述べたように、私は標準的な外在主義が自己知の認識的特権性とは両立しないと考える者であるが、BoghossianやMcKinseyの議論に必ずしも納得しているわけではない。彼等（及びその他の非両立論者）の議論に共通して見られる一つの論法は、自身の心的内容に関するアプリアリな知識から、外在主義を介して、外的世界の経験的事実に関するアプリアリな知識を引き出すことにより、背理法的に外在主義と自己知の両立不可能性を示そうとするものである。だが、この論法が成功しているかどうかについては現在も論争が続いており、私の印象では、少なくともそれは両立論を決定的に反駁するには至っていない。両立不可能性を示すには、別の方向からアプローチする方が有効であるように思う。そのことを説明するために、McKinseyの議論を少し詳しく振り返っておきたい。その論法の要点と問題点が彼の議論によく示されているからである

10。

### McKinseyの議論

始めに、外在主義の標準的な形を簡単におさらいし、なぜそれが

自己知を一見脅かすように見えるのかを確認しておこう。タローは地球人であり、水はおいしいと信じている。他方、双子地球では水がまったく存在しない代わりに、水と異なる分子構造（「XYZ」と略記される）をもつが表面上は全く水と区別できない物質（それを「水」と表記しよう）が存在する。その双子地球で、タローの対応者であるタローが、水はおいしいと信じている。このとき、その二人の信念内容は異なるが、二人の身体内部の物理的状态は全く同じでありうる。それ故、標準的な外在主義は一般に次のような結論を受け入れる。

(B) *de dicto* 態度文（例えば「水はおいしい」とタローは信じている」）によって帰属されるある種の中立的な認知的状態は必然的に、その状態が帰属される主体にとって外的なものの存在に依存する。

さて、外在主義が一見自己知の特権性を脅かすように見えるのは次のような理由による。右の(B)によると、ある人がある認知的状態にあるか否かは、しばしば、その本人が経験的探究によってのみ知りうるような外的事実によって決まる。そのような場合、その人は自分の心的内容をアプリアリに知ることはできない（この例で言えば、タローは自分の信じている内容が「水はおいしい」であるのか、それとも「水はおいしい」であるのかをアプリアリに知ることができない）ように見える。(11)ここでは取り敢えずMcKinseyに倣い、経験的探究とは独立に得られる知識をアプリアリな知識とし、自己

知の特権性とは、自身の中立的な認知的状態の内容についてアプリアリに知ることができることを意味するものとする。）

DavidsonやBurge等は、その自己知の特権性に対する外在主義の「脅威」が単なる見かけ以上のものではないことを主張しているわけだが、McKinseyはその主張に異を唱える。彼が主なターゲットにするのはBurgeであるが、Davidsonについても簡単に批判を加えているので、まずそれを見ておこう。

Davidsonの診断によると、その「脅威」が本物のように見えるのは、次の二つの前提を受け入れているからである（[10]p.58）。

1. もし思想が頭の外部の何かとの関係によって同定されるならば、それは完全には頭の中にない。
2. もし思想が完全には頭の中にないならば、それは一人称的権威が要求するような仕方では把握されえない。

Davidsonが問題視するのは前者の前提である。この前提は、彼に言わせれば、日焼けが太陽の存在を前提するからといって、日焼けが皮膚の状態ではないと論じると同じように間違っている。つまり、心的な状態（ないし出来事）が頭の外部の何かに関係付けることによって同定ないし記述されるといふ事実から、その心的状態そのものが頭の外部にある（それゆえ特権的接近が不可能）と推論する誤りである。

McKinseyはDavidsonのこの論点を取り上げ、それが不十分であると論じる（[14]pp.10-11）。一つには、以下で見るように、彼が説得的とみなす非両立論の論拠がその種の誤りを含んでいないという

ことがあるが、彼は特に、その論点によって擁護される特権的接近のあり方に懸念を表明している。心的状態は、我々がそれを記述する仕方とは独立に存在する内的な出来事であるから、その出来事の記述が持つ外在主義的な含意が何であれ、その出来事への特権的接近は成立しうる。このように彼は Davidson の論点を解釈した上で、これによって擁護される特権的接近は弱すぎて哲学的な興味を引くものではないという。というのも、記述とは独立に特権的接近によって得られるような知識とは、その内的出来事が生じているといった程度の知識であろうからである（その内的出来事が心的出来事であると想定する根拠すらない）。だが、哲学的な興味を引く特権的接近のテーゼは、単にある心的出来事が生じているかに関わるものではなく、むしろ、ある記述（特に認知的内容に言及するもの）を満たすものとしての心的出来事が生じているかに関わるものである。そして、その後者の意味での特権的接近について Davidson はその可能性を否定しているように見える。このように論じて彼は、Davidson が一人称的権威を擁護すると主張するのはせいぜいミスリーディングであるように見えると批判する。

私は、Davidson に対するこのような批判はフェアではないと思う。というのも、Davidson はその論点だけで自己知の認識的特権性が保証されるとは考えていないからである (cf. [10] pp. 60ff.)。その論点によって彼が言おうとしていることは、自己知の一人称的権威に対する脅威は、単に心的状態の同定に外在的要素が関与するという事実に由来するのではないということにすぎない。むしろ彼がそれ以上

に強調していることは、自己知の一人称的権威に関する伝統的なイメージは、彼が「主観性の神話」と呼ぶものの産物であるということである。主観性の神話とは、命題的態度を、本質的に私秘的な心的対象との関係によって捉えることを指すのであるが、そのような捉え方は根本的に誤っており、志向性が本質的に社会・公共的な要素によって成り立つことを正しく捉えるならば、自己知の一人称的権威に対する外在主義の「脅威」というものが単なる錯覚であることが明らかになる、と彼は言っているように思われる。私自身、彼のこの主張を十分納得しているわけではないが、自己知の一人称的権威が外在主義の外在的な性格によって脅かされるわけではないというのは正しいと思う（つまり、先の二つの前提の後者のほうも自明ではないということである）。確かに、内在主義的な観点から自己知の一人称的権威がどのように説明されるのかは決して明らかではない<sup>4</sup>。だから、自己知の認識的特権性の問題を専ら外在主義との関係で捉えることは、問題の本質を見落とす恐れがある。外在主義が果たして本当に自己知の認識的特権性と両立するのかを考える際も、そのことは念頭に置いておくべきポイントであろう。

しかしながら、McKinsey の念頭にあるのは伝統的（つまりデカルト的）な認識的特権性の概念であり、Davidson はその概念そのものを批判しているのだから、両者の対立は結局、志向性そのものあり方に関する見解の相違に行き着くだろう。McKinsey がその伝統的な概念に固執する限り、彼に言わせれば、Davidson は自己知の認識的特権性を擁護するのではなく批判していることになる。いずれ

にせよ、外在主義が自己知の一人称的權威についての伝統的なイメージと両立するののかという問題に関する限り、DavidsonはMcKinseyにとって興味を引く論敵ではないといえる。それに対してBurgeが擁護する認識の特権性は、McKinseyの見るところでは、より伝統的なイメージに近いものである。したがって、McKinseyの主要な論敵はBurgeとなる。

McKinseyによらば、Burgeは次の三つの命題が互いに整合的であると主張する ([14p.12])。

- (1) タローは、水はおいしいと自分が考えていることをアプリアリに知っている。(原文: Oscar knows a priori that he is thinking that water is wet.)
- (2) タローは水がおいしいと考えている、という命題は必然的にEに依存する。
- (3) 命題Eはアプリアリには知られえず、ただ経験的探究によってのみ知られうる。

(EはMcKinseyによると、水はおいしいというタローの思想を広い状態 (wide state) となす前提を含む「外在的命題」である。)

右の三つの命題が果たして互いに整合的であるか否かは、(2)における「必然的依存」の意味による、とMcKinseyはいう。彼によると、その意味には形而上学的なもの概念的なものとがあり、前者の意味では整合性が成り立つが、後者の意味では成り立たない。だが、外在主義のテーゼとしての(2)は後者の意味で解釈されねばならない。

したがって、外在主義者は右の三つの命題が互いに整合的であると主張することはできない。そのように彼は論じる。

「必然的依存」を形而上学的な意味で解すれば、なぜ整合性が成り立つのか。そして、外在主義者はなぜその解釈を取るべきではないのか。それは次のような理由による。形而上学的な必然性と認識的なアプリアリ性とは異なるということは、クリプキ以来広く認識されている。実際、形而上学的に必然的な事実が認識的にはアポステリオリであり、認識的にアプリアリな事実が形而上学的に偶然であることはありうると考えられる。例えば、デカルトは自分が存在することをアプリアリに知っていたが、自分の存在が形而上学的にさまざまな物質的条件に依存することは知らなかった。この論点がここで示唆することは、タローが自分の思想内容をアプリアリに知っているということは、タローの思想が形而上学的に外在的な事実に依存しており、その外在的な事実をタローはアプリアリに知ることができないということと矛盾しないということである。つまり、(2)を次のように解した場合、それは(1)、(3)と矛盾しない。

(2a) タローは水がおいしいと考えている、という命題は形而上学的にEに依存する。

Burgeの議論のポイントは(2)を(2a)として解することにあるとした上で、McKinseyは、そのような解釈は(2)での問題にとつて的外れであると批判する。彼の言い分はこうである。外在主義は、単にある種の心的状態が外在的事物の存在に依存することを主張するものではない。というのも、もしそれが外在主義の主張であるなら、唯物

論を前提した場合、およそどんな心的状態も「広い状態」であることになり、外在主義は唯物論の瑣末な帰結に過ぎなくなるからである。実際、心理的な性質であれ何であれ、タローが自分の持つ性質を持つことは、タローの母親の存在に形而上学的に依存するだろう。だが、これは明らかに外在主義の趣旨とは異なる。水はおいしいというタローの思想が「広い状態」であるといわれるのは、タローのその思想を構成する脳状態の形而上学的本性に基づくのではなく、むしろ、「水はおいしいとxは考えている」という述語によって表される概念ないし性質の持つ性格に基づくのである。このように論じて彼は、(2)は次のように解されなければならないという。

(2b) タローは水がおいしいと考えている、という命題は概念的にEを含意する。

(McKinseyによると、命題pが命題qを概念的に含意するとは、pからqに導く正しい演繹が存在し、その演繹におけるp以外の前提はすべて、アプリオリに知られうる必然的ないし概念的な真理であり、その導出の各ステップは自然演繹の適切なシステムの自明な推論規則に基づいている、ということである。また彼は、概念的含意の関係を、形而上学的関係と対置される論理的関係として捉えている。)

(2)を(2b)として解した場合、確かにそれは(1)、(3)と整合しないように見える。(1)を仮定すると、(2b)によって、タローはアプリオリに知られうる前提(自分が水はおいしいと考えているという前提を含む)のみを使ってEを演繹することができる。タローはアプリオリに知

られうる前提からEを演繹できるのだから、Eそれ自体もアプリオリに知ることができる。だが、これは(3)と矛盾する。(3)を否定することは論外であるとすれば、外在主義者は(1)を否定しなければならぬ。それ故、外在主義と自己知の認識の特権性は両立しない。これがMcKinseyの主張である。

このMcKinseyの議論に対して、外在主義の側からどのような応答が可能だろうか。大まかに三通りの応答が考えられる(それぞれ(1)、(2b)、(3)を疑問視することに対応する)。まず、彼の言う自己知の認識の特権性は、果たして外在主義者が擁護する必要があるものなのかを疑うことができる。思想内容の一人称現在時制的帰属が、三人称(ないし二人称)的帰属には欠けているある種の認識の特権性をもつということは、常識心理学的な直観であり、正当な理由がない限り、外在主義者はその直観を拒否すべきではない。だが、McKinseyの念頭にある認識の特権性は、デカルト以来の伝統的なイメージのものであり、それは常識心理学的な直観とは別のものであると考えられる。実際、彼はアプリオリな知識というものを、経験的探究とは独立に得られる知識として捉えているが、自己知はその意味で純粹にアプリオリでなければならないわけではない。一人称的帰属と三人称的帰属との間の非対称性は、主に行動の観察などによる知識の媒介を必要とするか否かによるものであり、三人称的帰属で必要とされる媒介的知識が一人称的帰属では必要とされないからといって、その一人称的帰属によって帰属される知識の内容が経験的探究と全く独立であることにはならないだろう。経験的探究に

よって獲得した知識について、自分がその知識を持っていることを特権的な仕方では知ることができるといって考え方に不自然さはない。知識や信念の内容が経験のないし外在的な要素を含むかという問題と、自分がその知識や信念を持っているかどうかをどのようかのように知るかという問題とを区別する必要がある。

また、Eの内容を彼は具体的に明示していないが、その内容をどのように捉えるかが重要なポイントになる。まず思いつくのは次のような内容である (cf.[6]p.112)。

(E1) タローはXYZでなくH<sub>2</sub>Oを含む環境に住んでいる。

Eをこのように解することの問題点は、「タローは水がおいしいと考えている」という命題が (E1) を概念的に含意するなど主張する外在主義者が果たして存在するのか疑わしいということである。McKinseyは、(2)を概念的な意味で解釈しなければ、外在主義は瑣末なテーゼになるといって、(E1) に形而上学的に依存する心的状態は自ずと限定されるはずであり、(2)を形而上学的な意味で解しても決して瑣末なテーゼにはならないだろう。そもそも、概念と形而上学は互いに全く無関係ではなく、概念が特定の形而上学的コミットメントのあり方を規定することはありうる (例えば自然種の概念はそういうものである)。いずれにせよ、McKinseyの外在主義の捉え方には問題があるように思われる<sup>70</sup>。

Eの内容を最大限大雑把に捉えるならば、次のようになるだろう。

(E2) 外的世界が存在する。

Eをこのように解することの問題点は、(3)が自明ではなくなるとい

うことである (cf.[6]p.118)。外的世界が存在することをアプリアリに知ることができないのは明らかだとMcKinseyは言い切るが ([4]p.16)、そもそも外的世界の存在は経験的探究によって知られるような事柄ではなく、だからこそ悪名高い懐疑論の問題を引き起こすのだが、少なくとも、外在主義者にとって(3)を否定することは決して問題外ではないだろう。

### Brownによる改良

McKinseyの議論に改良の余地はあるのだろうか。一つの(恐らく唯一つの)方法は、「外在的命題E」の具体的な内容を特定化することである。即ち、Burge流の外在主義を前提した場合に、心的内容に関する自己知からアプリアリに導くことができ、しかもある程度限定された経験的内容を持つ命題Eの特定化である。実際、Brown[4]がBurge[8]の議論に依拠しながら、それを試みている。そして、多分、McKinsey流のアプローチから両立論を批判するとすれば、Brownの定式化が最良のものである。それ故、彼女の議論も見ておく必要がある。

Burge[8]は、水が存在しないか、あるいは自分以外の人間が存在しなくても、水について考えることはできるとしながら、水も自分以外の人間もともに存在しない状況では水について考えることはできないと論じている<sup>71</sup>。即ち、

想定しがたいのは、「タロー」が、水の本性について比較的無知



で無関心でありながら、水も共同体の仲間も存在しない状況で、水の観念を含む信念を抱くことである。(8[p.116])

なぜなら、タローは水がH<sub>2</sub>Oであることを知らないのだから、水や水についてよく知る仲間が存在しないとすれば、タローのその信念を水ではなく水に関するものであると見なす根拠がないからである。Brownは、Burgeのこの論点に着目し、心から世界への導出関係についてアプリアリに知られ得る次のような命題を引き出す。

Q: 必然的に、もしxが自然種kの概念を含む思想を持ち、かつxがkの概念の適用条件について不確かであるならば、xはkを含む環境に住んでいるか、または、xはkの概念を持つ共同体の一員である。<sup>(9)</sup>

同様の論点は自然種以外の概念にも適用できる。タローは、「ソファア」の概念が、我々が「ソファア」と呼んでいるものに加えて、大きいシングル・シートの安楽椅子にも当てはまるのかどうか不確かであるとしよう。我々が「ソファア」と呼んでいるものと大きいシングル・シートの安楽椅子の両方に当てはまる概念を「ソファア」で表すとすれば、タローが「ソファア」という語を用いるとき、ソファアを意味するのか、それともソファアを意味するのかは、タローが属する言語共同体において「ソファア」がどちらを意味するものとして使われているかによる。いずれにせよ、それがBurgeの外在主義である。さて、もしタローの住む環境に他の話し手が存在しないとすれば、タローはソファアについて考えることができるだろうか。自然種の場合であれば、実物との直接的な因果関係によって、

タローがどの自然種の概念を持っているかを決定する余地があるが、このケースでは、他の話し手がいなければ、タローの持つ概念がソファアではなくソファアであると決めるものは何もないように見える。従って、次の命題が引き出される。

R: 必然的に、もしxが非自然種概念cを含む思想を持ち、かつxが概念cの適用条件について不確かであるならば、xは概念cを持つ共同体の一員である。

このRも、「ソファア」の例による議論が正しい限り、アプリアリに知られ得る命題である。そこで、このQとRを使って、xを「私」に、kとcを「水」や「ソファア」等で置き換えれば、アプリアリな自己知からアプリアリには知られ得ないはずの世界についての知識がアプリアリに知られ得ることになる、とせっかちな非両立論者なら主張するところであろうが、Brownは周到である。彼女は、正しくも、ある概念が自然種概念であるか非自然種概念であるかはアプリアリに知ることはできず、従って、QとRのどちらの条件が成り立っているのかをアプリアリに知ることはできないから、QとRを使って世界についてのアプリアリな知識を導き出すことはできないと述べている。よく用いられる例であるが(彼女も用いている)、「翡翠」などの名辞が自然種名辞であるか否かは、その語に対応する自然種が存在するか否か、及びその語がどのように使われているかによる。実際問題として、「翡翠」に対応する単一の自然種は存在しないことがわかっており、(多分その結果として)社会的に「翡翠」という語は自然種名辞として使われていない<sup>(10)</sup>。それ故、ある名辞

が自然種名辞であるか否かについて誤ることは十分にありうる話であり、それはアプリアリには知り得ないのである。だがBrownは、QとRから、アプリアリに知られ得る次の命題を引き出すことにより、その問題をクリアしている。

S: 必然的に、もしxが概念cを含む思想を持ち、かつxが概念cの適用条件について不確かであるならば、xはcの事例を含む環境に住みかつcは自然種概念であるか、または、cが自然種概念であろうとなかろうとxは概念cを持つ共同体の一員である。

xを「私」に、cを任意の概念を表す名辞で置き換えれば、Sの条件は確かに、自己知の特権的性格により、それが成り立つかどうかをアプリアリに知ることができるように思われる。そして、実際、ある概念についてSの条件が成り立つことがアプリアリに知られるならば、世界についての事実を述べるSの後件が成り立つこともアプリアリに知られることになる。だから、「水」の適用条件について不確かであるタローは、水に関する自分の命題的態度を内省するだけで、自分が水を含む環境に住みかつ水が自然種であるか、または、自分が水の概念を持つ共同体の一員であることをアプリアリに知ることが原理的に可能である。しかしこのことは、Burge[9]が、心的内容を個別化する外在的事実について我々は経験的にしか知り得ないと述べていることと整合しない。それ故、Burgeが世界についてのアプリアリな知識を否定する限り、外在主義と自己知の認知的特権性をともに認めることはできない。これがBrownの議論である。

McKinsey流のアプローチから両立論を批判するにはBrownの定式化が最良であろうと私は述べたが、実は少し手直しが必要である。というのも、McLaughlinとYe[16]及びFalvey[12]が論じているように、上述のRにBurgeはコミットする必要があるからである。つまり、非自然種概念を含む思想を持ち、かつその適用条件について不確かでありながら、共同体の一員でないことは可能である、とBurgeの立場でも認めることができる。Brownが上述のように「ソファー」の例を使って、BurgeがRにコミットしていると論じるとき、タローが既に何らかの言語共同体に属していることを前提しているように見える。なぜなら、「他の話し手がいないければ、タローの持つ概念がソファーではなくソファーであると決めるものは何もない」という論拠が意味を成すのは、タローが「ソファー」という語を個人的な造語として使っているのではなく、他者と共有される(従って共同体的規約による適用条件を持つ)公共言語の言葉として使うことを意図している場合のみだからである。実際、McLaughlinとYeが指摘するように、タローのその例は、Brownの意図に反して、まさにRの反例になっている。孤独な環境に住むタローは、「ソファー」という語の厳密な定義を曖昧にしながら、その語を我々が「ソファー」と呼ぶものに適用できる程度には彼なりに「ソファー」の概念を持っていると言えるからである。

しかし、Noonan[17]が最近指摘したように、簡単な手直しを加えれば、BrownのBurge批判は依然として有効であるように思われる。即ち、Rを次の命題と取り替えるのである。

R'：必然的に、もしxが非自然種概念cを含む思想を持ち、かつxが概念cの適用条件について不確かであるならば、xは概念cを持つ共同体の一員であるか、または、xはcの事例を含む環境に住む。

そうすると、Sは次の命題と取り替えられる。

S'：必然的に、もしxが概念cを含む思想を持ち、かつxが概念cの適用条件について不確かであるならば、xはcの事例を含む環境に住むか、または、xは概念cを持つ共同体の一員である。

S'はQとR'の論理的帰結であるから、QとR'がアプリアリに知られ得るならば、S'もアプリアリに知られ得る。Qについては既に見たように、Burgeの論点が正しければ、アプリアリに知られ得ると言える。R'についてはどうだろうか。上述の孤独なタローはR'に対する反例にはならないから、R'が偽であるかどうかは少なくとも明らかではない。そして、もしR'が真であり、それ故アプリアリに知られ得ると言えるならば、例えば、「自分は水を含む環境にいるか、または、自分は水の内容を持つ共同体の一員である」といった、ある程度特定化された経験的内容をもつ命題が真であることをアプリアリに知り得ることになる。

Burge流の両立論を擁護するには、Noonanが言うように、共同体に属さない孤立した個人が、概念cの事例に遭遇したことがなく、しかもその適用条件について不確かでありながら、その概念を持つことができるということを示すか、少なくとも、その可能性はアプ

リアリに排除することはできないということを示す必要があるだろう。私には、それは無理であるように思われる。というのも、問題の概念の適用条件について不確かであり、かつそれについて不確かでない仲間がない場合、その概念に対応する事例との直接的な因果関係以外に、その個人がその概念を所有するための拠り所がないからである。孤立した個人にとって、適用条件の不確かな概念は、その概念の事例をいわば錨として、直接それに結び付けて固定する必要があるのだ。

### 標準的な外在主義が自己知の認識的特権性と

#### 両立しない本当の理由

このMcKinsey-Brownの論法は、Burge批判としてはよくできているように思われる。それでも、私の印象では、両立論そのものを決定的に反駁するには至っていない。Burge本人は、一般に反懐疑論的な帰結が出てくることを好ましくないと考えているようだから (cf. [10], p. 71)、彼に対する批判としては有効であろうが、既に述べたように、外在主義と自己知から反懐疑論的な帰結が出てくることは一概に悪いとは言えない。実際、Brownの改良版でも、それほどひどい帰結 (例えば、E.O.の存在がアプリアリに知られうる、というような) が出てくるとは思えない<sup>10</sup>。確かに、「自分は水を含む環境にいるか、または、自分は水の内容を持つ共同体の一員である」という命題は、「外的世界が存在する」という命題よりも、より限定

された内容をもつが、その認識的身分はそれほど隔たっているわけではない。日常の現象的レベルにおいて我々が素朴に「外的世界が存在する」と信じているとき、我々が実際に信じているのは、単に外的世界が存在するということよりもむしろ、我々が日常において接する水や猫や人間などの具体的個物や性質が存在するということであろう（世界は、まさにそれらの現象的に与えられる個物や性質たちが存在する空間としてイメージされる）。現象的所与のレベルでは、（頭が覚醒状態で正常に機能している限りは大抵）世界の事物に関する自身の命題的態度の内容に現れる個物や性質への認識的接近は、当の個物や性質への認識的接近と実質的に変わらないと考えられる。さらに、上述の Noonan による修正は、反懐疑論的な帰結を受け容れやすくするのに寄与している。というのも、その修正によって、自分の所有する概念が自然種概念であるかどうかをアプリアリに知る可能性が排除されているからである。しかし、いずれにせよ、私がここで言いたいことは、この McKinsey-Brown の論法は、標準的な外在主義と自己知の認識的特権性が両立しないことを示すものとしては不十分であり、問題の核心を捉えていないということである。

問題の核心はもつと単純で直接的な仕方では捉えることができる。すなわち、外在主義における信念帰属のあり方を問うことである。「信念のパズル」と呼ばれることがあるが、標準的な外在主義では、矛盾（ないし混乱）した信念を帰属させねばならないように思われるケースが発生しうる。それは、信念間の論理的連関が複雑で見通

せないために生じる類のものではなく、比較的単純な矛盾である。例えば、「痛風」は関節の痛みだけを指すものとされる社会において、「大ももに痛風がある」という信念は矛盾（混乱）していることになる。しかも、この種の「矛盾（混乱）」は決して特殊なものではないから、その信念主体を不合理な人物と見なして済ませるわけにはいかない。標準的な外在主義の枠組みで、不合理性やその他の精神的異常（フロイト的抑圧なども含む）を伴うことなくそのような矛盾（混乱）した信念を持つことがいかに可能かを説明するには、自己知の認識的特権性を否定するしかないように思われる。つまり、我々は自分が思っているほど、自分の信じている内容を特権的な仕方では知っているわけではない。それ故、不合理に陥ることなく、矛盾（混乱）した信念を持つことがありうることになる。

ところで、両立論に対する今一つの典型的な反論としてよく引き合いに出されるものに、いわゆる「スロー・スウィッチング」のケースがあるが (cf. Boghossian[2])、これも本質的には同じ問題であると考えられる。すなわち、本人が知らないうちに、双子地球におけるその対応者と置き換えられてしまうケースであるが、双子地球に移住してからある程度の年月が経ったあとに、その人が「水はH<sub>2</sub>Oである」という信念を抱くとき、標準的な外在主義では、その信念は端的にナンセンスであることになる（その内容は実質的に「XYZはH<sub>2</sub>Oである」に等しいから）。この場合も、なぜそのような信念を抱くことが可能であるのかを合理的に説明するには、心的内容に関する自己知の権威を否定しなければならぬように思われる

このような帰結は、標準的な外在主義が基本的に、心的内容が本人の与り知らぬ外的要因によって決まってしまう可能性を認めるものである限り、避けることができないであろう。「狭い内容」を指定することによって、自己知の権威をその内容に関して認めるという方法も考えられるが、それは標準的な（少なくともHarsanyi流の）外在主義からは外れる（また、その方法はそれ自身の問題を抱えている）。まして、不合理な命題的態度を認めることによって両立論を維持するのは問題外である。外的世界に関する懐疑論を批判することは、どちらかと言えば常識にかなうことであるのに対し、日常的にありふれた命題的態度の合理性を批判することは常識への挑戦であり、理論的にも十分動機付けられているとはいえない。信念帰属の眼目は、主に行為の説明に関係しており、上述の類のナンセンスな信念は、行為に関して何らかの説明力を持つとは考えられないからである。

このような理由で、私は標準的な外在主義が自己知の認識的特権性と両立するとは思わないが、冒頭で述べたように、外在主義一般がそれと両立しないわけではない<sup>13</sup>。外在主義とは基本的に、心的内容の個別化が外在的な制約を受けると主張するものであり、その外在的な制約が当の認識主体の与り知らぬものでありうると主張する必要は全くない。もちろん、心的内容が因果的に依存するすべての条件（環境的要素だけでなく生理学的要素なども含む）を知る必要はないが、特定の（任意のではない）内容の個別化に関係する外

在的要素は当の認識主体にとってむしろ接近可能なものでなければならぬであろう。というのも、心的内容が、行為などを導くのに有効であるためには、その内容は、その主体が認識的に接近できる要素によって構成されていなければならないと考えられるからである。だが、何が認識的に接近できるか（あるいはどのような情報が利用可能か）は、その主体の置かれた様々なコンテクストに依存する。だから、自己知の権威を尊重する外在主義の基本的な形は、思考や行為が行われる特定のコンテクストを重視するものであろう。例えば、この地球で「水」という語によって指示される物質の大部分がH<sub>2</sub>Oであるとしても、一七五〇年以前のようにその事実が認識的に接近可能でないか、あるいはその事実が水に関する特定の思考や行為にとって有意味でなければ、H<sub>2</sub>Oは水に関する心的内容の個別化に関わってこない。標準的な外在主義の根本的な問題点の一つは、「水」のような語の表す意味や概念などが、特定の思考や行為がなされる様々なコンテクストを通じて一定不変である、という疑わしい仮定を前提していることにあるといえるだろう。

#### 注

(1) この認識的特権性は、不可謬性や訂正不可能性などを伴う必要はない。また、それは自覚されない無意識の信念や欲望といったものが存在することも許容する。重要なことは、我々が意識することのできる自分の命題的態度の内容について基本的に、間接的な証拠（他人の信念内容などを推測する際に必要とされるような）によらないで、直接的に知ることができる（単に信じるだけでは

- ない)ということである。ただし、意識化可能な命題的態度でも、「知っている」のように、関連する命題が真であることを要求される場合は、認識的特権性は必ずしも成り立たない(だから、ある命題について、自分はそれを知っているのか、それともただ信じているだけなのかを特権的な仕方では知るわけではない)。また、関連する命題が真であることを要求されない場合でも、自分がその命題に対してどの態度をとっているのかについて明白でないことがありうる(例えば、信じているのか、それとも期待しているだけなのか)。外在主義との両立可能性についてここで問題にするのは、関連する命題の真理値に関して中立的な心的態度の内容に関する自己知の認識的特権性である。
- (2) Davidsonの立場は「標準」からは外れると思うので、以下では標準的な外在主義として、専らBruecknerの立場を指すことにする。ただし、私はDavidsonの立場に共感しているわけではない。
- (3) その論法のBoghossianのヴァージョン(13)については、Burgeに対する批判としては効果的ではないことをBrown[5]が説得的に示している。
- (4) Heil [13] p. 247ff. もこのことを論じている。また、Boghossian[2]pp. 14-15を参照。
- (5) もっとも、認識的特権性の意味について注(1)で述べた限定をMcKinseyが否定するとは思えないから、伝統的なイメージといっても、それなりに希薄化されたものであると考えられる。それ故、彼の念頭にある伝統的なイメージとは何なのかは必ずしも明白ではない。
- (6) 実際、Burge[9]とHeil[13]は、自分の思想内容を知ることが、自分の思想を成立させている条件についての知識を要求しないということを強調している。
- (7) この点についてはMcKinsey[15]とBrueckner[7]との間のやり取りも参照。
- (8) ただし、その次の引用文にある「水の本性について比較的無知で無関心」という条件が当てはまらない人、即ち、水は水素と酸素の化合物であるといった理論的知識を持つ人は、水も他の人々もともに存在しない状況でも、水について考えることができることをBurgeの議論は示唆している。
- (9)  $x$ は、水が $H_2O$ であるといった経験的事実を知らなくても、Burgeのその論点(この論点は特定の自然種の例を持ち出さなくても述べるができる)を理解するだけで、 $Q$ が成り立つことをアプリアリに知ることができる、というのがポイントである。
- (10) ここでは、ある語を自然種名辞として使うことと、その語が実際に自然種名辞であることとを区別している。即ち、ある語が自然種名辞であることは、その語が自然種名辞として使われていることに加えて、その語に対応する自然種が存在するということがある。 Cf. [4]p. 154 n. 9
- (11) だから、Burge、Brownの論法によって自分の立場から反懷疑論的な帰結が出てくるとしても、そのことにひるむ必要はないと私は思う。
- (12) Burgeは、基礎的自己知としての「自分の思想内容を知ること」と、意味や概念を正しく説明できるという意味での「自分の思想内容を知ること」とを区別するべきだと述べている ([10]p. 77ff.)。 (Burgeの言う「基礎的自己知」とは、自分が何を考えているのかを判断すること自体がその判断を真となすような構造をもつ知識のことである。)そして、後者の意味での自己知については認識的特権性が成り立たないことを認めている。自分が何を考えているのかを知るのに、その考えている内容の意味や概念を正しく説明

である必要はない、というのを彼は強調したいのであろうが、これは結局、ある意味では、外在主義と自己知の認識的特権性は互立しないことを認めるのに等しいからにはお認めされる。また、Burge流の社会的外在主義者は積極的になんかことを認めればいいのではないかとも思う。というのも、言語共同体において、語の正確な適用条件の規定を他者にゆだねて、自分自身はよく知らずに（あるいは誤解して）その語を使っているとすることは、割りとありふれた現象であると考えられるからである。なか、‘スロー・スナッチメンツ’については、記号の問題が絡んでおり、種々おぼつ論じたことでもいえる。

(3) 素縁、Bilgrami[1]時が回様の素縁からBurge流の自己知を批判している、独自の外在主義を提議している。

文献

- [1] Akeel Bilgrami, *Belief and Meaning*, (Blackwell, 1992)
- [2] Paul A. Boghossian, ‘Content and Self-Knowledge’, *Philosophical Topics* 17 (1989) 5-26.
- [3] Paul A. Boghossian, ‘What an Externalist Can Know A Priori’, *Proceedings of the Aristotelian Society* 97 (1997) 161-175.
- [4] Jessica Brown, ‘The Incompatibility of Anti-Individualism and Privileged Access’, *Analysis* 55 (1995) 149-156.
- [5] Jessica Brown, ‘Boghossian on Externalism and Privileged Access’, *Analysis* 59 (1999) 52-59.
- [6] Anthony Brueckner, ‘What an Anti-Individualist Knows A Priori’, *Analysis* 52 (1992) 111-118.
- [7] Anthony Brueckner, ‘The Characteristic Thesis of Anti-

Individualism’, *Analysis* 55 (1995) 146-148.

[8] Tyler Burge, ‘Other Bodies’, in *Thought and Object: Essays on Intentionality*, ed. by A. Woodfield (Oxford University Press, 1982).

[9] Tyler Burge, ‘Individualism and Self-Knowledge’, *Journal of Philosophy* 85 (1988) 649-663, rep. in [10].

[10] Quassim Cassam ed. *Self-Knowledge*, (Oxford University Press, 1994).

[11] Donald Davidson, ‘Knowing One’s Own Mind’, *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association* 60 (1987) 441-458, rep. in [10].

[12] Kevin Fahey, ‘Anti-Individualism and Privileged Access’, *Analysis* 60 (2000) 137-142.

[13] John Heil, ‘Privileged Access’, *Mind* 97 (1988) 238-251.

[14] Michael McKinsey, ‘Anti-Individualism and Privileged Access’, *Analysis* 51 (1991) 9-16.

[15] Michael McKinsey, ‘Accepting the Consequences of Anti-Individualism’, *Analysis* 54 (1994) 124-128

[16] Brian McLaughlin and Michael Tye, ‘The Brown-McKinsey Charge of Inconsistency’, in *Externalism and Self-Knowledge*, ed. by P. Ludlow and N. Martin (CSLI Publications, 1998)

[17] Harold W. Noonan, ‘McKinsey-Brown Survives’, *Analysis* 60 (2000) 353-356.

# Is Externalism Compatible with the Epistemic Privilege of Self-Knowledge?

MAEDA Takahiro

Is externalism about mental content compatible with the epistemically privileged character of self-knowledge? My answer is that an orthodox form of externalism championed by Burge is not, contrary to Burge's claim, but that alternative forms of externalism can be. A typical way of showing incompatibility points out that, when externalism is combined with epistemic privilege of self-knowledge, facts about the external world become deducible a priori. But I argue that such an argument cannot definitely refute alleged Burgean compatibilism. The heart of the problem lies in an orthodox externalist's account of belief-ascription. Orthodox externalists, so long as they accept the epistemic privilege of self-knowledge, must ascribe irrational beliefs to agents illegitimately in many cases. And precisely for this reason, they cannot accept the epistemic privilege of self-knowledge. Externalism which rightly acknowledges the privileged character of self-knowledge places due importance to particular contexts within which action and thinking occur.

## Key Words

externalism, self-knowledge, a priori, anti-scepticism, belief-ascription